

# プラハ日本人学校での現地理解と平和学習

前プラハ日本人学校 教諭

兵庫県神戸市立塩屋中学校 教諭 種 井 一 郎

キーワード：現地理解，交流，平和学習，プラハ

## 1. はじめに

初めてプラハを訪れた時、その美しさに息を飲んだことを覚えている。早朝や夜遅く、人気のない街を歩くと、まるで中世のヨーロッパに迷い込んだような錯覚を覚えることもあった。「百塔の街」や「魔法の都」など様々な呼称で呼ばれる1000年あまりの歴史を持つ中欧の古都、それがプラハである。

オレンジ色の屋根が広がる旧市街周辺は、プラハ城と共に世界遺産に登録されている。「建築博物館」と言われるほど様々な様式の建物があり、数百年の齢を重ねた建物それぞれに刻まれた歴史があることを感じる。街の中心部からトラム（路面電車）に乗って20分ほど西へ行ったところにプラハ日本人学校がある。

1980年開校のプラハ日本人学校（以下、本校）は児童生徒約100名の、日本人学校としては中規模の学校で、プラハ市西部の高層アパートがたくさん建ち並ぶジェピー地区（Řepy）にある。この地には2004年に移転し、本校にとっては5番目の校舎である。学校周辺には、住民の多さを反映してか、3つの基礎学校があり、それらの学校との交流も、盛んに行われている。また、地域とのつながりを大切に、積極的に地域の行事などにも参加している。

チェコ共和国国内唯一の日本人学校として、さまざまな行事に招待されたり、出演を依頼されたりすることもあり、それらを通じて現地理解や国際交流の活動や学習が行われている。その中にリディツェ村平和祈念式典への参加がある。この交流活動がチェコの近代史へ目を向けるきっかけになり、様々な現地理解と平和学習の実践につながった。

## 2. リディツェ村平和祈念式典への参加

### (1) リディツェ村

リディツェ村（Lidice）はプラハの西北西約15kmにあり、第二次世界大戦中に、当時のチェコ（ベーメン・メーレン保護領）副総督であったラインハルト・ハイドリヒ（Reinhard Tristan Eugen Heydrich）暗殺に対する報復として、地上から消された村である。

ハイドリヒは、ナチス政権のもとで国家保安本部の長官としてドイツの警察権力を一手に掌握していた人物である。また親衛隊ではハインリヒ・ヒムラーに次ぐ実力者であり、ユダヤ人問題の最終解決を決めたと言われるヴァンゼー会議（Wannsee Conference）の議長を務めた人物でもある。

彼の暗殺後、その報復としてリディツェ村の15歳以上の約200名の男子はすべて銃殺され、女性と子どもたち、約280名のほとんどは強制収容所に送られ、住民のいなくなった村の建物はすべて焼かれ、壊され、上から土をかぶせられて、完全に地上から抹殺されてしまった。

現在、旧リディツェ村の跡地は平和祈念公園になっており、毎年、虐殺の行われた6月11日に近い土曜日に各国の代表者が来賓として出席して平和を祈念する式典が開かれる。公園には、平和を願うバラ園があり、そこには各国から送られたバラがたくさん植えられている。その一角には様々な悲劇を経験した都市の名前が刻まれた場所があり、第二次大戦末期に激しい空爆によって壊滅的な被害を受けたドレスデンや広島の名前も見ることが出来る。



2007年から本校は、祈念公園にある「こども像」の前で、毎年合唱を披露させていただいている。私が赴任した2010年度は交流4年目の年であり、次第に日本人学校の合唱披露が祈念式典の中で定着してきた頃であった。また、赴任3年目にはリディツェ村での虐殺から70年という節目の年を迎え、例年に増して盛大に祈念式典が行われ、日本人学校の合唱も式典のプログラムに記載されるようになった。

## (2) 教員の事前研修

毎年、新着任者を中心に祈念式典での合唱披露に向けた研修が行われている。旧リディツェ村へ出向き、現地のガイドの方から説明を聞きながら村の跡地をまわったり祈念館での展示を見たりする。この研修で、日本から来たばかりの教員のほとんどは、リディツェ村についてはじめて知ることになる。また、研修を通じて交流に参加する意味を考えると共に、学んだことをどのように自分が担当する児童生徒達に伝えるか考える機会になった。

## (3) 参加児童生徒

交流が学校休業日の土曜日に実施されることを考慮し、5年生以上の児童生徒から有志を募って参加した。毎年、ほとんど全員の児童生徒が参加した。

## (4) 事前学習

毎年、児童生徒会を中心とした事前学習が準備された。委員会活動がある5年生以上の児童生徒が担当教員の指導のもと、リディツェ村での出来事や祈念式典についてプレゼンテーションをまとめ、全校児童生徒に向けて発表した。小1から中3という幅広い年齢層に向けての発表なので、それぞれの学級担任がプレゼンテーションの補足の意味で学級指導を行った。また、廊下にも掲示物を張るなどして、交流への準備を進めた。

合唱の準備も、音楽科を中心に進めた。リコーダーの演奏を加えた年もあった。交流の日が近づくと、朝の時間や昼休みなどを利用して合唱練習を行った。

## (5) 交流当日

リディツェ村から迎えのバスに乗って会場へ向かった。村へ着くと、いろいろな国の旗をつけた高級車が並んでおり、緊張感が高まったのを覚えている。

午前中に祈念セレモニーが行われ、昼食をはさんで午後から様々なイベントが行われる。参加者がセレモニーの会場から次の会場へ移動する途中にある「子ども像」前で本校児童生徒は合唱を披露した。派遣1年目、2年目は、本校の合唱は正式なプログラムではなく、どちらかというと、ひっそりと平和への祈りを込めて歌わせて頂いているという感じであったが、3年目にはプログラムにも載せられ、テレビカメラも入り、たくさんの聴衆の前での披露となった。

発表を聞いたくれた人々は、一曲終わるごとに盛大な拍手をくださり、交流に参加した児童生徒達は、自分達の思いが伝わったと感ずることが出来たのではないかと思う。

## (6) 事後学習

事後学習で書いた児童生徒たちの作文には、「こども像と一緒に歌っているようなきもちになった。」とか「歌で平和を願う思いを伝えることが出来た」というものがあった。

## 3. 様々な平和学習の取り組み

リディツェ村平和祈念式典への参加は、児童生徒のみならず、教員にとっても平和について考えるきっかけになった。赴任1年目の後半から、主に中学部の同僚たちと協力して平和学習を広げる取り組みを試みた。以下にその実践を挙げる。

### (1) テレジーン (Terezín) 強制収容所見学

赴任2年目、リディツェ村で学んだことをさらに深めるために、中学部の生徒達と共にプラハ近郊にある強制収容所とユダヤ人ゲットー跡を見学した。

プラハの北、60 km程の所にテレジーンはある。1780年に建造され、マリア・テレジアの名前から名付けられた大小二つの要塞である。小要塞は古くから監獄として使われ、オーストリア皇太子を暗殺した犯人も収容されていた場所である。第二次世界大戦時にナチスドイツにより、小要塞は強制収容所として、大要塞はユダヤ人ゲットーとして使用された。



人間が人間を閉じ込め、虐殺した収容所跡地の前に広がる墓地、100人余りが収容された部屋、独房跡など半日余りの見学の後、生徒も教師も沈んだ気持ちのまま帰校したことを覚えている。

### (2) 中学部2年生 ベルリン・ポツダムへ修学旅行

テレジーン収容所見学2週間後、ベルリン・ポツダム修学旅行へ出掛けた。年度当初から平和学習を目的に準備を進めた二泊三日の修学旅行だった。

一日目にベルリン郊外のベルリン日本人国際学校を訪問した。その後、ベルリン日本人国際学校近くにある、ヴァンゼー会議記念館を見学した。ここは、チェコ副総督であったハイドリヒが議長を務め、「ユダヤ人問題の最終的解決」を話し合った場所である。美しいヴァンゼー湖のほとりにある瀟洒な館が、恐ろしい話し合いの舞台であったことに生徒達は驚いていた。

ポツダムでは、ポツダム会議の舞台になったツェツィーリエンホーフ宮殿を見学した。今までの学習ではヨーロッパの戦争というイメージが強かったが、改めて、日本も関わった戦争であったと、生徒と共に確認した見学であった。

ベルリンでは、東西冷戦の象徴であるベルリンの壁跡やブランデンブルグ門を見学した。戦争が終了し、やっと解放されたと思った人々が、政治体制の違いにより東と西に分けられるという悲劇を学んだ。それと共に、第一次世界大戦以降のドイツとチェコを含むその周辺の国々が歩んだ変化の激しい歴史を学ぶことが出来た。

### (3) プラハ市内ウォークラリー

ウォークラリーの課題として、1968年、ソ連軍のプラハ侵入に抗議し、焼身自殺したヤン・パラフを記念するモニュメントを探すというものを加えた。平和学習を通じて学習した東西冷戦について、再度考える為であった。生徒達は、人が自らの命を賭して抗議するというこの意味を深く考えたようであった。

### (4) 学習発表会での英語劇

赴任3年目の学習発表会では、中学3年生の英語の教科書に出てきた、原爆が落とされた当時の広島を舞台にしたMother's lullabyを演じた。教科書にあった3つのお話の中から自分たちがしてきた平和学習につながるという理由で生徒たちが選んだものだった。チェコに長く住んでいる何人かの生徒にとっては、広島、長崎はテレジーンやベルリンの壁よりも遠くに感じるということが分かった。事前学習として、原爆投下の惨状や日本と中国の戦争について学んだ。

練習を通じて生徒たちは、原爆で死んでいった人々を思いやり、その気持ちを考えようと努力していた。

### (5) キリルとメトデュイ教会の見学

キリルとメトデュイ教会は、ハイドリヒを暗殺したチェコ亡命政府軍の兵士たちが身を潜めていた場所である。仲間の裏切りにより居場所がばれ、彼らを捕えに来たドイツ軍と激しい戦闘をした後、自決をした場所が教会の

地下にある。現在そこは彼らを記念する場所となっている。

事前学習として、生徒達は邦題「暁の七人」という映画を見た。ハイドリヒ暗殺とその後の兵士たちの運命を描いた映画である。今までの学習の積み重ねの結果なのか、映画を見ながら涙する生徒も何人もいた。

#### 4. 課題

平和学習を通じて教師も児童生徒も平和の大切さを考える機会を得た。しかし、3年間一緒に学習し、ナチスの非道に対して決して許してはいけないと発表した生徒たちにしても、最近の日本と周辺国の外交問題の話題になると、過激な発言をすることもあった。学んだことと、現実の問題を繋げて考えることの難しさを感じた。過去の事実を学ぶとともに、学んだことを現実の問題にどう生かすかを考える必要があると痛感した。

#### 5. 最後に

ここに挙げた以外にも、小学6年生によるドレスデン修学旅行や学習発表会での平和学習の成果の発表など、様々な取り組みがあった。

すべての取り組みは、同僚との協力なくしては実行不可能であった。また、教師の思いを素直に受け止めてくれる児童生徒無くしては、決して成立しないものであった。プラハで私と関わってくれた児童生徒と同僚たちに感謝し、本稿を閉じたい。